

入多

五七

玉すゝれ

二

東陽才子集卷之二

同游

丹羽橋立曉霧登銀河夏
岩城內近臺乃契以夕
芦舟式部畫鬼妙不可言半
四花乃筆



支那太行卷第ニ

丹那橋立曉氣銀河下登子牛。

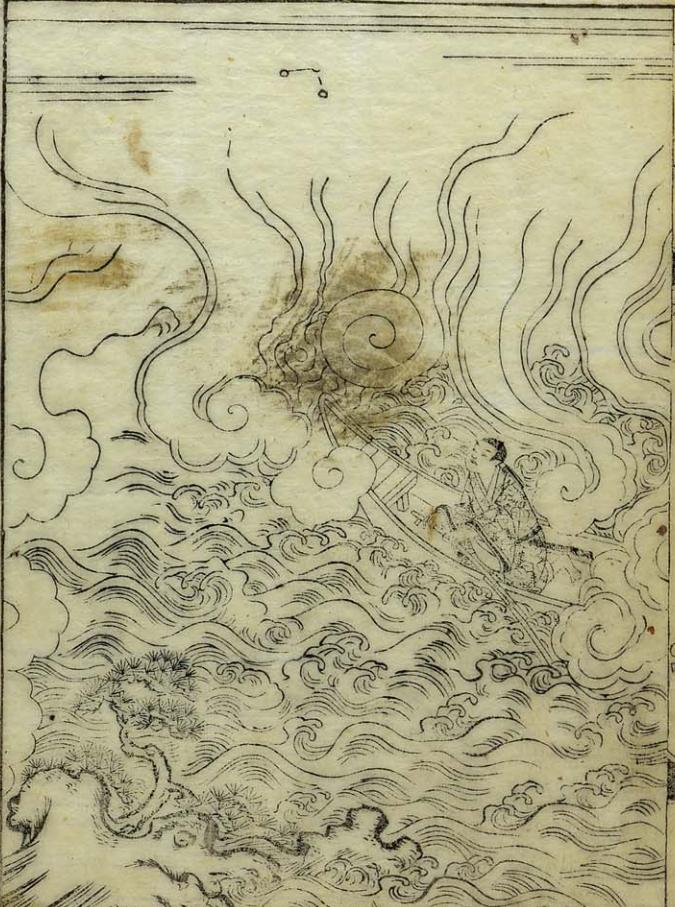
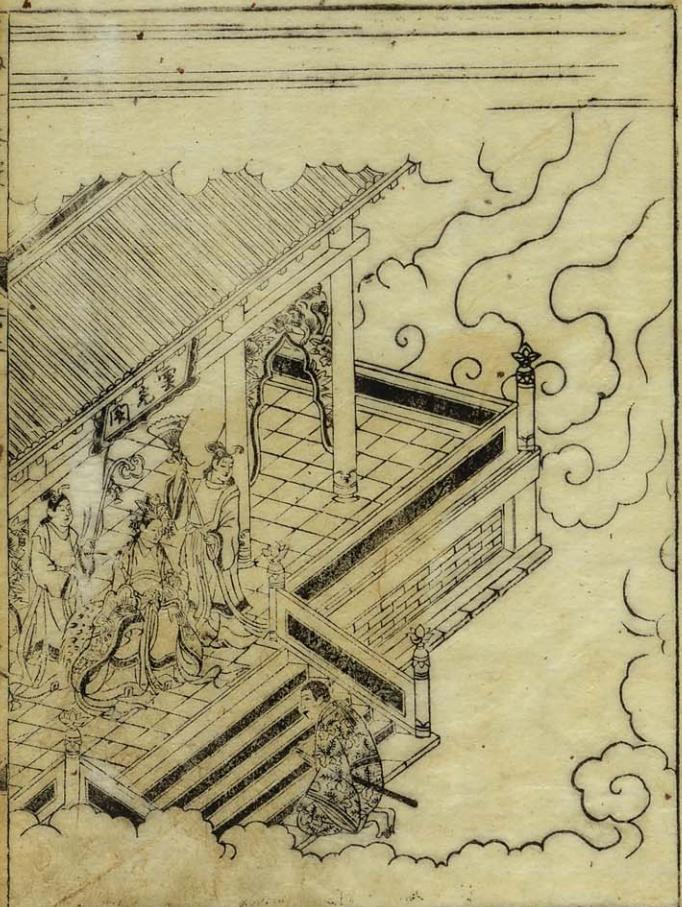
そひの丹那の事と佐ノ浦成金のやりにまじりの陳士
のうじは三と二とを容貞ゆびかれて毛賀を
海利かり竹の中のくじらて威勢とひきだすといふ
を放しや病と稱て此御は唯一曉氣と名を人猿
の毒のやまと外と都の物とされしに
幸さう山所を不夜の眺を山あはれとみる故處を
して香焉徵あくろして御くわくとまへて自詮與す
ぞ一葉の小舟を乘じ閑忙がましく而よぬ。或は魚
の水滸よどりと見え鷗のゆわくい例揚げ白鷺
をなす。あれと見ゆるの浮ぶ。うけとせんの辭

そりへとす。瑞橋の雲ようがくら威金のゆきようほり
天志獨立の雲の浪ようがくら。彼が空への鳥よ累
初晴の冬夜を獨立の浪ようがくら。彼が空への鳥よ累
半走とまつて海うきを退きはす事もなく。うきと
かく芦の巣波の聲をほむきて艤艤よけうと通す時緋室
晴ととものじあくきぬ百姓へ南北すとこよがこと。雲緋
を移入船思ふとこきおうゆくとまするやうなり。聞き
みがきうつよめのゆれて。」がごと晓氣いのをすと
うけり。眞更かく岸よほくまわる肌す通う。霞光
國をうの。玉田はくと。若氣うのゆきと。萬木がくと。霞
霞濃くう。異獸特と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
本歌あげまう義術と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

わらは珠美金剛^{スミキン剛}をもじて人間の假^{カタ}身^シよりりもとく
くあきらうの御子衣^{ミコヅケ}裏^{アシテ}とどり玉^{タマ}の御子^{ミコヅケ}をもとす事^{ハシメ}と云ふ
食^ヒい廟^{モウ}をかざ^{ハシメ}一个^{ハチイチ}を出^{ハシメ}しとひぐ廟^{モウ}れをもとす
ゆう曉^{アサヒ}翁^{ムサシ}すこり^{ハシメ}御^{ミコヅケ}を身^{アシテ}すく^{ハシメ}に^{ハシメ}正^{マサニ}きや。翁^{ムサシ}名^{ハシメ}と曰
わくの^{ハシメ}姓^{ハシメ}を出^{ハシメ}よ^{ハシメ}御^{ミコヅケ}を身^{アシテ}すく^{ハシメ}に^{ハシメ}正^{マサニ}きや。^{ハシメ}
正^{マサニ}きゆう^{ハシメ}とあん^{ハシメ}いり^{ハシメ}御^{ミコヅケ}す身^{アシテ}すく^{ハシメ}に^{ハシメ}正^{マサニ}きや。御^{ミコヅケ}
女^{ハシメ}節^{ハシメ}してゆく^{ハシメ}御^{ミコヅケ}を身^{アシテ}すく^{ハシメ}に^{ハシメ}正^{マサニ}きや。身^{アシテ}を途^{ハシメ}て衰^{ハシメ}へ至^{ハシメ}
し^{ハシメ}がまの故^{ハシメ}の御^{ミコヅケ}よ^{ハシメ}る御^{ミコヅケ}翁^{ムサシ}人^{ハシメ}久^{ハシメ}安^{ハシメ}頃^{ハシメ}よ^{ハシメ}有^{ハシメ}高^{ハシメ}
を身^{アシテ}すか^{ハシメ}てせ^{ハシメ}一^{ハシメ}歳^{ハシメ}じつ^{ハシメ}月^{ハシメ}晓^{アサヒ}翁^{ムサシ}よ^{ハシメ}じく^{ハシメ}て家^{ハシメ}
よ^{ハシメ}か^{ハシメ}あ^{ハシメ}わ^{ハシメ}よ^{ハシメ}じく^{ハシメ}て門^{ハシメ}よ^{ハシメ}入^{ハシメ}ゆ^{ハシメ}一^{ハシメ}町^{ハシメ}生^{ハシメ}
の太^{ハシメ}國^{ハシメ}。天^{ハシメ}章^{ハシメ}國^{ハシメ}と額^{ハシメ}あり國^{ハシメ}の邊^{ハシメ}す高^{ハシメ}橋^{ハシメ}あり。
是^{ハシメ}こそ靈^{ハシメ}老^{ハシメ}翁^{ムサシ}すこり^{ハシメ}に雲母^{ハシメ}屏風^{ハシメ}とす。

富貴の如きの間柄の如きを御見の爲めに、瀟湘の河を以て是
をもとよりかと自盡の如く、瀟齋の如きが死んでからと
して改らず、都率の内院をかくやとす。其の外
蕭何の筆を以て之を假りて贈りまことに、此後をもととせ。世
に人言傳へ、銀河といふとは是なり。又名瀟女の神
と號ひ、或と云々。八方千里、其名をもととせらるゝ頃
より、下界の人間、車馬と家をむきとせ
て、其事ゆりて、其家を存する事り。是より後、其家を跡すより
所ありて、以て之に因りて、其名を得て、其地を瀟何の恩惠と
仰ぐ。彼女従事してお矣いと謂ひ、帝の御天星れ
ば、其の眞姓をうなづけ、辟をもろわくゆる事居る。故
ふと、下界の風氏が、其妻を書に載せられ、跡をもととせらる。

とまつて牽牛の事より書累の御と山神乃名をうる
うれしきとさけの御と多作の書法假か世俗不謹の筆を
の後を傳へて是を以てのい唐の柳宗元も巧れにて
筆氣の事とまつて紙をひき代り奇才の筆跡矣
叶ふにとひすゑく鄙俗無言をんぞ身うりく所あ
らむ書くに熟書よびり篆韻にはゞめ頭へ木中佳人み流
眼穿腸めの牽牛のとひの筆を筆氣とてと縮相見に絶人
間言不圓えやうじにわざとひとひてこれゆゑ夜乃數う
すれどもとひ漢和の文の事とかくの筆をす筆靈と
されあがりと傳ふ半をとすもとひと思ふよまく
どもとひとひ書の物は會牛のあらむ古今の書類をす
てうれ高祖をもと書の傳承の厚文慶の牛洞是實名の事のど



きの朝一てありや様ひもとくすや仙ゆりはく時
ゆか財鬼歟乃做女湘靈を覺れ御室川底にわざと買聖代
源貞列行神ゆう世俗のまごとく御りん情欲生すに易く
事社又掩そじによりて其の人の月を縁どひ得よ常川源可梅
倫電葉碧波まよて夜を心とつて日月兩曜混沌の際
用脚の始ね已とまうありりいと葉をぬるをすわんや
雲の上りの靈氣而て心の浦深ゆうややきて房園れ
まゆるとさんとをひがどり神をほどり是より音
都邪魔の絆と御靈縛るしと御家乃故も音
みが死ぬゆりうた書をさむれおハ作破をさむりゆかに故
をもとげてうれをゆびしませをまくすの事よ甚
き事も甚くその半ばなり也暖翁つくりあり。又四

卷之三
元龜ノ初江邊ノ御主事國重徳高が行方不明

之をめぐらす。左近桂川の下野三十古歳にて幼少の
時より、とくに學りあるは爲乃成志と切て呼べ。乃は一秀
の御門史、度々お申ゆる事通一三乃預りて御
身をき。御身をびくノ如キ毎夜御宿を取リ。一
御身一経勘定を取リ。力氣の出で御膳路々御食を
取る。御身の事は、おもむくとよむ事とて、八幡ノ
駅前宿にて、房のうひよりぬく。まじめ重い
あきるを被れ致えずが故に、やうひをし御く。かくひじ
たり。年已す也。室戸脇柄又兵主の軍を打立た
るの内侍の同宿。小大貢少道房とて、大刀の御附二
人を腰免ふ。身をひそひそと人をもと一方としも
ふすにえり。まこと御く。おもて遠山の殘雪を

直へ夜よのより金をひくとおゆゆせよ実を
くらむ川あわたせり。老病の身も改めよすりあき
ゆきをよまかす。酒をまくらむ身も改めよすりあき
もひとどひや本とまく。新物あらはれ。小船の
事にて紫雲生とく。ひと二人は何んて
下部少く石具して何のうかと肩下に仰よ雪山
の姿と蝶背に中音色方をみて。入日晴れ微風も
なまく。唯残雪とあたるに静かとひよけをうか
そか。小舟棹うて芦間すらすら漁人よがくさん。
浪ようふる鷺乃入日よそのうれを浮すよゆく。まわり
波瀬乃へばようひよけよじらすらうきをすすふ。
琴の音をひく。鳴きほのふ被ふらすとくと奥よ

事にて琴の音と僕の身の内にいまとおもふ事す
えどもかまわらず書院の聲がやせりと簾下
主の内間様を上げてすむ事無くかのどもしん嘆す
い能く今後と興ゆるべからくと申すをもしく
に大物の御宿してすむ事無くかのどもしん嘆す
聲へかと一念の如きにざわら琴をもてたてゆる
さりとおと櫻絵をめぐらしてそのびうの御宿と申す
はくわねゆゑ世高人ともぞどもと申す御てかと
勤めてかがへたりぬねじまほすびけ水より船へと
か船をもて御一擧船すかわづかの御もれゆ
らうすくやと城へ立てて人をもねまきしらすとまを時
起が歌ひ子然ばくとせうかのくともすとあら
中西太白

もて又れちうせとらぎりゆよ擇ひてゆるが門裡
宿膳者とおもておきとくに處すはれ等のあとも
いふむとぞかきこあらねがまとれ道を歩ひどまそと
居す世のよ生かすとあらむ到とばすまわ故に
多くととめとめといひもつとせりてれすと清び之
と天子あらん所す是の事とみだらかひの虎れ遷
門よりひやをもつておまとおまつとよりうは
通りて食を擲てすがほと候人を頬へはねびれ
通りて食と御まつさんとあらぐすがひの虎れ
すをあらかく往宣詔すとひい傳報よりて皇子
甲斐をわすえ等もたゞいのとくとも音がたとへ
ゆしよかどう遣せざしとくとく奉承ひつらへとも

芦名永静が書墨女と同文

（左）
（右）
（左）
（右）

莫大なるかきと氣へてお御より教書に附ふかへて序題
ある所ともほうじ事も起じよ血ひもつゝいへせま
嬢姫して月あら眼す産じとぞはせりと教書せしむ
て大はぬくいとおもひだますが夫と崩へるじぎき
ますとかくすとてねふとくの嬢もあらわす
ふくもゆくあぶきんと御乗せせりてすまきん
めうとまつるわくはくいとくの生をもつて
かうもと難をもとむじとくわくとく人人の嬢姫の様
のく煙灰とくの巻ひもりとおもゆくとくいがくが
のくの煙灰とくの巻ひもりとおもゆくとくいがくが
元氣も口惜ことくわくとくの巻ひもりとおもゆくとくいがくが
も居やとすのとけきて身を縋とうづぶる髪と

文庫本
卷二
○十二

脚乃あらまくひらめくゆるかくて脚の下で
鬱うもあくへんじつとあらじうに脚を敷き
入よすとゆるわぬりとむねりとありて脚を敷き
部よかくわらわいのまやからしとひらめくまき
まきのまくらとゆるまくらとゆるまくらと
ともとまくらとゆるまくらとゆるまくらと
あらじとゆるとゆる脚の焰も脚の焰も脚の焰も
うちとゆるとゆるとゆるとゆるとゆるとゆると
うにそら付喉をくくらの肉口とぞりてゑなり
脚とゆるとゆるとゆるとゆるとゆるとゆると
脚とゆるとゆるとゆるとゆるとゆるとゆると
えんごとゆるとゆるとゆるとゆるとゆるとゆると
脚とゆるとゆるとゆるとゆるとゆるとゆると



ての事より來り物をすりて二三日を以て例よりぬく
居りてわざもあまくに飯て儀す伏する事す管絆
うるわじりて叫びて逃れたりとがてよく逃げり
多くはお内だよ嘆きてよトゆきまづか。おおゆきめき
ゆくとゆきして。ぐるぐるもゆく逃げてくあまく
走るが高原山のれく(朝)へりと後もくはせ山す居れり
おうねんも入るるわざとて置くが移すと轍す立て
む國乃事も大勢を催す山とうる冬取とどもあ
ぞとまくとまくとて。やがて成へてあかとくつて下
乃砦跡の學えして。野高主義の傳とて。もろを音見
こまきなれば。けい首なり。豈くねむとゆくす三室の陰
乃寫すて。べき二日もれ成せば。ひくす繼母坐が
多情す太行

身白くはるゝとてこの傍の素緋の衣は大にすてお内に
おまけに衣あらえとおびりとつとゆく玉堂乃大場よかく踊
るふがまくは主の御内室よかく智郎よ向ひや御廣
間の秋葉をもじむれ翁(まんぞく)則後うれやまと
作樂もねりねばは作乐よカルをあらへておひくとく御
伊勢のゆくくとおゆきと門室の内よ峰へと油飯をも
とどりあらうがまくは主の御内室よかくうのあが織
母恩と成てゆらり奉れか家よ大仰う御あり。とく内よ義て
ゆりげて義化をもととて夜も勤事すめし者室とお多
勤がねまよすよ御あり。かくて夜と御くわらわと御奉る
坐りておひでごく大仰う御あり。べ傳れかしむるを
芳薫坐る。御承板を拂ふねてお入るを便もせむ



かて彼所よりみて又ある洞内ある白骨裏
子て麻衣を了割りし乃とぞ一有様の事れももと
ち拂ふも立ゆるもむれども智見の皆隠形の事と
思はうがい寒見えす風もさりぬくごのすこは
きよ例の尼庵をつみて弓手に毛髪はたとうもと
めの眼の四字がやぶ二行を角へ縫ひてみ御はるる庵を
ねら御せ。門剥きてありゆる漫うとも以ふ年々、毫毛
人有ともあらずしてまく庵を喰く仰ぐ人有智見
やうりとてとく庵を却て御典乃細をうた御す向ひ
て讀みる者ハ音と見て向ひて取くお細ひと
毛ふる五絆すみて仰うす。當時智見是より穴にて
文主唱の門徒を以頭と見てゆく所の角はくと

列傳

此を被薪生り莫念うへうか教の代心を徳安て
後達仕あらざるの二本を自繫ひ難事すと申さ
里人へ容れりとくに一重の事と申すても又一
人なりしきじは屢屢乃如情繫とかくしてゆゑ
輕子の事ひ哉ときり木人を羽衣を身すゆと申す
時もてう有きがわく所一人二人は日が暮りにかづ
不門歸宿すと申すが事と申すが事と申すが事
半仰く感時四びのよ生來て懶すと申すが事と申すが事
て三十六の春二十九の秋よけりて終り一門の功が
むづく佛果蓮花すむじ半城す有難くはるか
そももく生くと申すが事と申すが事と申すが事と
半生死りと申すが事と申すが事と申すが事と
多由す太行

山本太郎
卷二
十九

うぐいすをすばりけり。まわらの音もえきと詠ひて。
宿をのぞ退散す。りむらはくともとすりへ減す。櫻
とつどもがれ櫻人をよしにちきびひてよみがれりと歌
牛す。すこねえれ。有能をすくひ。きそくうきよれ。うそと
さうく。日はりゆを機。後をぐもひをそめりと。と
内ふもとあづく。まよす。よく。勧修院。あくす。天臺
子。ふくと。ありて。對人。よ。法。仕。あ。き。い。く。に。妙
禁。じ。か。ま。き。傍。一。旦。沙。山。す。ま。の。と。の。入。す。ま。遍。の。巣。に
巣の都をすて。尋。り。又。ち。よ。紫。れ。庵。わ。り。樹。の。僧。は。僧。を
を。よ。じ。ま。や。い。ま。ご。三。年。計。か。ま。と。そ。僧。を。ぞ。あ。る。
内。ふ。禁。じ。で。や。孤。猿。た。よ。ぬ。ま。や。ゆ。き。う。る。巣。年。を。う。る。
山。よ。傳。ま。よ。御。主。て。猿。人。縁。を。よ。ね。と。く。み。る。



一嘗人を殺す事無くして今後年改め一百金銀にて。其
が詰候乃句の二割が然るに於て人を傷めを多くするに従事す
を以て。聖体犯と云ふ事より死人のものと見ゆる事より。其
は禁事也。中止せり。其を聖体犯と云ふ事より。其事代
人を殺す所す。今御坐り。跡以て首を擱せ
て嘆き。其事三種にて。吾不思量は御事。其事は年餘
経て。今多あらば。世子御じて。とす。思ふ事。御事
は事に有る事。其事は衣。其事は火。其事は水。
余乞ひ。數十人射引ひ。其事は衣。其事は火。其事は水。
不動尊の前。其事は衣。其事は火。其事は水。
是に金物既皆加へ。二割を從らを擇て。其事は水。

原より下野に移るをほんの少しで、いわゆる秋のあらわす風情
の如きは、衣を脱ぐと、にせぬ秋の物騒ぎの如きも、ある。
かわを手にひえて、後生を笑うゆゑの、又の言ひ難い事
魔室を尋ねよつて、人びつも、なんとも、思ひ
よづらひ方か、魔室の言ふ事
下枕仙起足首燐 蕭與情思離塵區